探偵小説における前書きの特徴
アガサ・クリスティー、ジョン・ディクスン・カー
エラリー・クイーン

日 吉　和 子*

Distinguishing Features of Forewords in the Detective Stories by Agatha Christie, John Dickson Carr, and Ellery Queen

HIYOSHI Kazuko*

In a previous paper, the author studied eighty-two “Perry Mason” detective stories by Erle Stanley Gardner. In his day, Gardner was well-known as a detective story writer who once sold 26,000 books a day at the peak of his career. In those days, all of his “Perry Mason” books were as famous and popular as those by Agatha Christie, John Dickson Carr, and Ellery Queen. Now those “Perry Mason” books have disappeared from bookstores and have been forgotten, while the books by Christie, Carr, and Queen are still on the shelves. That paper discussed the reasons for the disappearance of books about Perry Mason. In this paper, the distinctive features of forewords by Gardner, Christie, Carr and Queen are compared and contrasted. The forewords by the latter three writers are classified into two types. However, Gardner’s forewords are distinctively different and categorized into a third type. In this paper, which is the first of two parts, the forewords by Christie, Carr and Queen are discussed. In the second paper, the forewords by Gardner will be discussed.

＊　城西大学　語学教育センター准教授

はじめに

ペリー・メイスンを主人公とする探偵小説が現在絶版となってしまっている原因を前回は考察してみた。今回はこの小説が持つ独特な一面について考えてみることにする。それは、私の知る限り同類の探偵・推理小説にはあまり見られないかなり珍しい特徴である。それは小説の内容ではない。それは、本文に入る前に付けられる著者による前書きである。

一般的に推理小説の本文に入る前には、まったく何も付いていない場合がかなりあるが、大別すると、前書きには2種類あると考えられる。まず、“To XX”とか“For XX”と言う形式で、著者が家族や親しい知人等、1人や多くとも2、3人の名前を挙げる献辞タイプである。それには名前だけの場合と二言三言、長くても本文4、5行分程度の言葉が続く場合もある。ここでは、この種の非常に短い献辞も前書きに含め、第1タイプとして扱うことにする。次に、それよりも長く、ペーパーバック版（文庫版）で1ページ前後から場合によっては数ページに及ぶ前書きである。これは、特定の人物だけでなく、一般読者も対象になっている。これが第2のタイプの前書きである。それを踏まえ、ガードナーの「ペリー・メイスン」作品の前書きを読むと、それらとは異なる特徴が浮かび上がってくる。第3のタイプである。そこで、今回は、その前書きの視点から、ガードナーとペリー・メイスン作品について考察する前に、前回比較対象とした作家たち、アガサ・クリスティー、ジョン・ディクスン・カー、そして、エラリー・クイーンの前書きを中心に見てゆくことにする。この3作家の作品は、ガードナーの上記の作品シリーズとは違い、日本語に翻訳された文庫本のみを使用している。最初に比較的前書きが少ない作家から始めることにする。

ジョン・ディクスン・カー、エラリー・クイーン、アガサ・クリスティーの前書き

1．ジョン・ディクスン・カー

一番献辞が少ないのは、ジョン・ディクスン・カー、またはカーター・ディクスン名義の作品である。手元にある翻訳版48冊を調べてみた。その内、第1タイプの前書き、つまり、人物を指定した短い献辞が、次に挙げる5作品、1.『盲目の理髪師』、2.『曲がった蝶番』、3.『墓場貸します』、4.『ニューゲイトの花嫁』、5.『死の館の謎』[1)]の冒頭で見つかった。それぞれ、1.「パット・コヴィッチに」、2.「ドロシー・L・セイヤーズへ　友情

と尊敬を込めて」、3.「クレイトン・ロースンに捧ぐ　かの偉大な二つの技能 “友情”と“奇術”を称えて」、4.「クラリサに捧ぐ── 拙い作品を上梓するにあたり、その昔のR・L・スティーヴンスンの言葉をかりて、いささかの取得ありとせば　その功はそなたにこそ」、そして5.「メイコン・フライ氏の　技術指導に感謝して　本書を捧ぐ」となっている。1番目のコヴィッチに関して、この本の巻末に掲載されている戸川安宣による「好事家のためのノート」の中に説明がある。それによると彼は1888年生まれで、出版業界に身を置き、ジョン・スタインベックやソール・ベロウなどの著作を出版し、彼らから献辞を受けている。しかし、「カーとの関係は不明」で、「アメリカ出版史研究の一環として、この献辞は重要な意味を持つかもしれない」と、戸川は評している。

2番目のセイヤーズは、森英俊編著の『世界ミステリ作家事典　[本格派篇]』に詳しい説明があるほど有名なミステリー作家である。それによると、「ミステリ史上最高の女流作家。黄金時代にはクリスティと人気を二分し、初版部数ではクリスティを抜いたこともあった。一般的な人気という点ではクリスティに及ばないが、文章力、人物描写、文学性や思想性など、作家としての総合的な資質では上回っている」[2] イギリス人作家（Dorothy L・Sayers、1893-1957）である。英国に1933年から47年まで滞在していたカーが著作“The Mad Hatter Mystery”を出版した時、サンデー・タイムズ紙に彼の書評を書いたのが当時英国の主要なミステリー作家であったセイヤーズであった。その書評の中で、彼女は、「これは私が長年読んできた中で最も魅力的なミステリーである」と書いている[3]。この書評により彼女に認められたカーは、1936年にディテクション・クラブ（“Detection Club”、セイヤーズやクリスティーもここの会員である）に米国人として初めて入会が認められている[4]。この前書きの背景にはこれらのことがあると考えられる。

3番目のロースン（Clayton Rawson,1906-1971）もまた森英俊の本によると、「今世紀最高のマジシャン探偵グレイト・マーリニの生みの親」で「奇術をなりわいとしていたと思われているむきがあるがマジックのほうはあくまでも趣味」で「奇術趣味と探偵小説を融合」させた探偵小説家である。また、1963年から70年まで「エラリー・クイーンズ・ミステリ・マガジン」の編集に当たり、「数々の新人作家を世に送り」出した人物である[5]。カーが英国から米国に帰り、ニューヨーク州のママロネックと言う町に購入して住み着いた家から通りを行った所に住んでいたのがロースンである。カーはこの同業者のロースンと親しく付き合っていたと言われている[6]。

4番目の献辞の中の「R・L・スティーヴンスン」とは『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』の作家“Robert Louis Stevenson”（1850-1894）のことと思われる。カーは少年時代

に多読家で、特に冒険小説が好きで彼の作品も好んで読んでいたと言われている[7]。そして、クラリサとは、カーの妻のことであると考えられる。最後のフライ氏とは、これも巻末の「好事家のためのノート」によると、カーの昔からの友人で、電気技師で、この作品内で使われている建物の「ワナを案出し、それが有効であること」をカーに確信させた人物である。そもそも献辞とは名前が挙げられた人物に対する著者からの個人的メッセイジの意味合いが強く、それゆえに、特に人物名に短いコメントが付くだけの第1タイプの場合は、当事者や彼らをよく知る人々以外には、その献辞の対象人物や内容には余り注意を払う読者はいないであろう。上記の献辞内容から判断すると、著者もまた読者にそれを期待していたとは考えられない。

ところで、それ程長くはないが、まとまった文章となっている点を考慮すると、第2タイプに属すると考えられる興味深い前書きが、『青銅ランプの呪』[8] で見つかっている。それは同時代の同業者のエラリー・クイーンに宛てたもので、文庫版1ページに収まるものである。ここでまず二人が推理小説について論じ合う仲であることが分かる。次に、「この作品のなかで展開されているようなかたちでの“奇蹟”の謎が――“密室”でないことをあらかじめことわっておかねばならないにしても―― 推理小説におけるいわば指し始めの一手としては最も魅力的なものであるという点で、わたしたちの意見が一致しているからである。わたしはここで、ジェームズ・フィリモア氏とその傘のことを思い出してほしいとだけ、そっと記しておこうと思う。これがきみに対するわたしの予告である。変わらず友情をこめて　カーター・ディクスン」と書いている。この前書きに関しては、この翻訳版の最後に戸川安宣による詳しい解説が付いている。この両作家や推理小説に精通していると思われる戸川の解説を読み、「ミステリ・ファンであれば、ピンとくる方も多いことだろう」[9] と評しているが、よほどのシャーロック・ホームズファンでない限り、「ジェームズ・フィリモア氏」とはホームズの1作品の中で語られるたった一文で一回言及されているだけの人物名であることに気づく読者は、戸川が予測するほど多くはないであろう。彼の解説で初めて分かる読者の方が多いのではないか、恐らく、この解説無しにはこの名前は読者にとって何の意味も成さないかもしれないと推測さえされる。つまり、この前書きは、特定の同業者宛の公開挑戦状という意味合いを持つ個人的メッセイジにあたると考えられる。

結局、ジョン・ディクスン・カーに関しては全著作を調べたわけではないが、48作品中6作品に献辞があっただけで、その割合は1割強となる。しかも、第1タイプで、名前だけの最も簡単な献辞と第2タイプもそれぞれ1つしかないことから推測すると、カーは献辞

を付けることにそれ程関心がない作家であったことが分かる。

2. エラリー・クイーン

それではエラリー・クイーンの場合はどうであろうか。こちらは対象となる作品が、彼自身の短編集も含めて手元には26冊しかない。その中で、1番目のタイプに属する前書きは、『オランダ靴の謎』と『アメリカ銃の謎』[10] で見つかっている。前者は、「S・J・エッセンソン博士に捧ぐ　医学関係事項について貴重な助言を与えられた感謝の印として」、また、後者では、「ある理由でC・レイモンド・エヴェリットに　そして別の理由でアルバート・フォスター・JRに」となっている。前者はこの作品の内容に関係した助言への謝辞であることは推測できる。ところが、一方、後者では、「ある理由」と「別の理由」で違う人物を名指ししている。それぞれどのような理由であるのか述べられておらず謎のままとなっている。これは、作品中で謎解きを読者に挑戦するクイーンらしい献辞であり、彼（彼等と言うべきか）の特徴のひとつと言えるだろう。

そして、1番目と2番目の両タイプの前書きを持つのが、エラリー・クイーンの第一作目の『ローマ帽子の謎』[11] である。まず1番目の前書きには、「本書の構想を練るに当たり、親身になって尽力してくれたニューヨーク市の毒物学研究主任、アレグザンダー・ゲトラー教授に深謝する。」と書かれている。これにより、この本が毒物と関係した殺人事件であることが示唆され、作品内容を予め知る手がかりを読者に与えている。次に、これを第2タイプの前書きに含めるとして考えると、クイーンの2つ目の特徴となる「捜査に関連する登場人物目録」がそれに続く。この一覧を添付する理由が、「さして重要とは思えない数々の登場人物」が、「やがて事件の解決におもだった役割を果たすこと」があり、「読者の便宜のため」であり、「わかりやすくすること」であると述べている。つまり作品中で読者に犯人を見つけ出すように挑戦状を突きつけるだけでなく、読者が登場人物を整理し、犯人を推理しやすくする手助けのために添付されているということになる。この作品では、実に35名の登場人物それぞれに独特なユーモアを感じさせるコメントが付いて紹介されている。その幾つかを挙げると、1.「すこぶる重要な人物 ── 被害者」から、2.「観客のなかには決まってひとりは医者がいる」、3.「どう判断したらいいだろうか」、4.「珍しくも賢明な地方検事」、5.「蠅 ── あるいは蜘蛛か」、6.「評判のよろしいご婦人」、7.「死者の事務所における、冥府への川の渡し守」、8.「富が幸福を意味すればいいのだが」、9.「年配の天使は役に立つ」、10.「新世代の万能執事」と紹介され、その後で、「問

題は── だれがモンティ・フィールドを殺したのか？　そのような謎を解く任に当たる聡明な紳士二人は── リチャード・クイーン氏　エラリー・クイーン氏」と続く。この部分だけで、実に文庫版で3ページに渡っている。これらは、それぞれがどのような人物なのか早く小説の中で出会いたい好奇心すら掻き立てるコメントであるが、犯人推理に役立つかどうかは読者次第であろう。筆者が自らこの類の一覧表を添付することは珍しく、さらに、通常の推理小説に出版社が添付する主な登場人物一覧とはかなり異なっているのは明らかである。たとえば、1. の人物モンティ・フィールドには単に「弁護士」、3. も「弁護士」、4.「地方検事」、 6 .「フィールドの愛人」、7.「フィールドの事務所の事務長」、8.「大富豪」、9.「衣装係」、10. は「クイーン家の召使」となる。2と5にいたっては名前すら挙げられていない。この出版社側の味も素っ気も無い紹介の仕方は、この翻訳版だけでなくどの推理小説にも共通して見られる表現方法であり、ここからもクイーンの登場人物紹介の前書きが、いかに独特のものであるかが分かる。

この登場人物一覧は、『フランス白粉の謎』[12] でも見られる。そこでは、「おもな登場人物 ── フレンチ事件の捜査の過程で出会う人々」の見出しで、「著者の覚書」の題がそれに付けられ、この作品に登場する関係者の一覧表を読者が読み、それぞれの名前を記憶し、読みながらも「たびたび参照する」ように勧めている。「探偵小説に没頭する最も痛切な喜びは、読者と著者の知力の戦いから生じる」、つまり筆者から読者への謎解き挑戦にあるとして、そのためにも「登場人物に細心の注意を払う」ことをここでも強調している。そして、その後に登場人物の名前と説明の一覧表が続いている。今回も30名にクイーン父子（リチャード・クイーン警視とその息子のエラリー・クイーン）を加えて、実に合計32名に及んでいる。最初の一覧表で独特な表現が示されているので、ここでは個々の詳細は省くが、クイーン警視には、「今回の事件で本領を発揮できず、いつになく苦悩する」、そしてエラリーには、「幸いにも事件を解決する」と言う説明が付いている。この人物紹介は前回と同様に3ページに渡っている。そして、これには、『ローマ帽子の秘密』で用いたこのリストが「好評を博し」、「人物目録を手もとに置いて重宝した」と言う読者からの反応が編者の注として付け加えられている。まさに読者を意識し、読者に謎解きを挑戦したクイーンの作家としての姿勢を如実に示す前書きである。

この独特な登場人物一覧は、この最初の2作品にはあるが、少なくとも手元にある翻訳版を読む限り、3作目以降の前書きには見られない。しかし、後で言及する『チャイナ橙の謎』にある登場人物紹介の表現方法がこれら2つのものに非常に良く似ていることが判明した。それは「登場人物── 登場の順序に従って── 」という見出しの後に、人物紹

介が続く。その中の幾つかを挙げると、「ディヴァシー嬢……病人と── そして、希望をはぐくんでいる」、「ヒュー・カーク博士……七十歳を超えた学者で、しばしば葬られるのは── 書物のなか」、「忽然と現われた無名氏」、「グレン・マクゴワン……必要な友人は、真の友人であることを実証した男」、「ドナルド・カーク……出版業者で、宝石、切手── そして厄介ごとの収集家」、「エラリー・クイーン……犯罪人と── その被害者をとっちめる」、「マーセラ・カーク……死体を見て卒倒し、あるいは卒倒したまねをする」などである。誰がこの部分を書いたのかは明記されていないが、これらを読むと、クイーンの人物紹介の表現と類似していることは明らかである。ただし、紹介されている人物の数が合計18名で既出の2つと比べると少ない。しかし、その点も、その紹介が1ページに上手く収まっているところを見ると、人数調整が行なわれた可能性が考えられる。とにかく、この人物紹介の存在により、翻訳される際にこの種の紹介部分が前書きから分離された可能性が浮上してくる。前書き自体が日本語翻訳版によっては無い場合もあることから、この人物紹介もエラリー・クイーンにより書かれた確率が高くなる。それゆえに、上記の2作品以外の『謎』シリーズにもこの種の人物紹介が添付されていた可能性はある。どちらにせよ、この人物一覧はクイーン独特のものであることには変わりがない。後に言及するが、『検察側の証人』の前書きで舞台上演する場合のキャスティングへのヒントを出しているアガサ・クリスティーですら、このような登場人物一覧表は出していない。

次に、エラリー・クイーンは、バーナビー・ロスのペンネームでも作品を発表しているが、その4作品、1.『Xの悲劇』、2.『Yの悲劇』、3.『Zの悲劇』、4.『ドルリイ・レーン最後の事件』[13] 全てに第2タイプの前書きが付いている。その最初の『Xの悲劇』の前書きには、『読者への公開状』の題が付けられ、この作品が出版された1932年ではなく、その後の1940年9月13日の金曜日と言う日付が付いている。ここでの最大の特徴は筆者本人の秘密、つまり、エラリー・クイーンが2人の人物の合作であるだけでなく、その2人が9年前（つまり、1932年）に、第2のバーナビー・ロスと言うペンネームで、クイーン父子とは別のドルリー・レーンが活躍する作品を、別の出版社から発表したことが語られている。そして、9年間公の場では、「二人の青年はめいめい黒い仮面に顔をかくして同じ演壇に立ち」、「たがいに推理作家としてはげしい競争意識を燃やして見せ」、クイーンとロスは「ぜんぜん違った個性であると言う幻想を保持し」、「善良な世人をたぶらかしつづけた」と書いているのである。しかも、ここでも読者に挑戦する姿勢を見せ、この9年間にも、「たくみな手がかりが一つちゃんと伏在していた」として、『ローマ帽子の謎』の序文を引用している。それは、「バーナビー・ロス殺人事件の捜査」で功績を挙げたリチャー

ド・クイーンが「犯罪捜査の有名な大家連と、肩を並べる名声を確立した」[14] と書かれている箇所である。これを基にクイーンは引き続き『X』の前書きの中で、バーナビー・ロスと言う新たなペンネームが作られたのは「この偽造の引用文」からで、ロスが生まれたのはこの「序文が書かれた1928年」だが、「ふたりの父親の手で正式に洗礼を受け本居を構えたのは1931年」と言うことになると説明している。さらに、クイーンは、「それで結局、昔も今も、これからも永遠に、バーナビー・ロスは……エラリー・クイーンであり、その逆もまた真」であると主張している。そして、「炯眼な」読者ならこの序文からクイーンとロスの関係を「わけなく突き止め」たであろうとしているが、実際にこの2冊の推理小説を同時に手に入れて読まない限り、以前に読んだ作品の、それもその前書きの内容まで記憶している読者は滅多にいないのではないかと思われる。しかも、リチャード・クイーンの名声がバーナビー・ロスの事件に由来すると言う一文から、その息子の名前のエラリー・クイーンとロスが同一作家であると気づく人はいるだろうか。ある意味で周囲から即座に一蹴されそうな奇想天外な意見であると評されそうである。これは既に言及しているカーのクイーンへの挑戦状的前書きの中に登場する「ジェームズ・フィリモア」の人物解明と同じぐらい難解であるのは確かである。クイーンは読者にこれほどまでの鋭敏な推理力と注意力を期待していたのだろうか。それとも、謎を作り出した本人にとっては謎は謎ではないので簡単に解けると考えたのだろうか。ところで、ロス誕生に関する作家クイーンの上記の説明でクイーンが手がかりが「伏在」しているとするその「序文」の書き手は、実は、彼（彼等）ではなく、J・J・マックと言う人物である。しかもこの箇所はクイーンや作中のクイーン父子の話からの引用で書かれたとは述べられていないので、マック自身が書いたことになる。つまり、ロスの名付け親はマックと言うことになる。しかし、クイーンは「ふたりの父親」と言う言葉を使うことにより、ロスの名前はクイーンが作り出したことを示唆している。そこでロスの名付け親をめぐる謎が生まれる。それに加えて、クイーンはこの引用箇所を「偽造」と言っている。それはすなわち、そこで述べられているリチャードの功績も「偽造」であると言っていることになる。そこで、他のマックの前書きの中のクイーン父子についての話の信憑性に関する疑問が生ずる。とにかく、この「序文」の書き手は本当にマックなのか、実はクイーンではないのか、その場合クイーンとマックは同一人物ではないのかと言うマックをめぐる謎をこの前書きは残すことになる。

『Yの悲劇』では、『読者への再公開状』の題が付けられ、「親愛なる読者諸君」で始まっている。これは、『Xの悲劇』の「『読者への公開状』を読みそこなった」り、「『Xの悲

劇』そのものを読んでいない読者」向けに、再度エラリー・クイーン作品が「エラリー・クイーンとして知られる二人組みの謎の著者によって書かれている」こと、そして、ロス名義で作品が発表された経緯を説明している。そして、これらのバーナビー・ロス名義で発表された4作品が、「エラリー・クイーンの出版社によって、本当の仮名であるエラリー・クイーン作として刊行されることになった」ことが、著者が同一であることを明かす背景にあると示唆されている。これは2ページに渡る長さである。『Xの悲劇』の前書きに見られる挑戦状的要素はここにはない。どちらかと言えば、この作品と主人公のレーンを読者が好きになってくれることを願う内容と言える。そして、「書いた人間のことなんか、どうでもいいでしょう」と言う言葉でこの前書きを終えているように、次の2作の前書きには同一作家であると言う説明箇所は無い。さらに、『X』では13日の金曜日と不吉な日付を付けているが、今回は「1941年春」と簡単になっていることからも、2つのペンネームを使い分けるという問題から解放された安堵感のようなものが伝わってくる。

『Zの悲劇』の『著者覚書』は、“Z”を題名に付けられる事件が起こるまでに10年かかったことが述べられている半ページに満たない短さである。しかも、これには前者2作品とは違い、日付がなく、しかも、この署名はバーナビー・ロスに括弧付けでエラリー・クイーンとなっている。

『ドルリイ・レーン最後の事件』では、『著者の心覚え』として2ページに渡り、主人公のレーンの人物像を述べ、「往年のイギリス劇壇の巨頭である」レーンが、この作品で、「法の守護者を自任してきた経歴に、ついに終止符を打つ」ことになったが、この事件が「犯罪史上かつて先例を見ない、珍奇にして純粋な魅力溢れる」ものであると書かれている。

ところで、ここで注目すべき点は、この前書きで、レーンが「犯罪事件の捜査なるものに介入する羽目になり」、「この分野において目覚しい実蹟を示し」、「筆者エラリー・クイーンはその悉くを忠実に記録し」、『Xの悲劇』、『Yの悲劇』、『Zの悲劇』として発表してきたと述べている点である。このレーンとクイーンの実在性を強調する内容は、『X』のクイーンの前書きの箇所で既に言及しているJ・J・マックと称する人物による前書きの書き方と極めてよく似ているのである。そこで、ここからは、両者を比べるためにもマックの前書きを見てゆくことにする。

まず最初は、『ローマ帽子の謎』である。この「物語に簡単な序文を寄せるよう」、「版元と作者の双方から頼まれた」という書き出しで始まるマックの「まえがき」[15] は、翻訳版で17ページから25ページに渡る長いものである。彼は「作家でも犯罪学者でも」な

く、「犯罪小説について権威ある意見を述べるのは、自分の力の及ぶところではない」と言いつつも、「この驚くべき物語を紹介するという栄誉に浴するだけの資格が」あると述べている。その理由として彼はこの物語を発表させた立役者である点を挙げ、その出版までの経緯をヨーロッパ旅行に出た先のイタリアで2年ぶりにクイーン父子に会ったことから話し始めている。まず、父子それぞれの現状から息子のエラリーの妻や彼らの息子について説明している。そして、彼らに会いに来た目的でもあった、「古びたスチール製の書類整理棚を長々と漁った後」出てきたエラリーの原稿を出版するように説得するくだりが述べられている。そこには父親や妻や幼い息子を巻き込んでの大騒動があり、結局、「物語に出てくる友人たちも重要な登場人物もすべて仮名にすること、本名は一般読者に永遠に明かさ」無いことを条件に、出版されることになった。そして、このリチャード・クイーンとエラリー・クイーンも本名ではないが、リチャードは実際にニューヨーク市警に32年間勤め警視にまで上り詰め、「父子により解決された事件の未公開記録が数多くあり、現在では市警の文書保管庫にしまわれている」と説明している。この記述により、この物語は「実際の記録に基づいている」ことが強調されている。そして、この物語は彼らが解決した事件の中でも「頂点に位置する」もので、「人間が思いつくかぎりで最も完全に近い計画犯罪」であったが、「クイーン父子にただひとつの手がかりを与え、それがついには計画者の破滅をもたらした」と解説し、ある意味で、その「ただひとつの手がかり」とそれを見つけ出したいと言う謎解きに対する読者の好奇心を煽っている。

2番目は、『フランス白粉の謎』である。そこでは、エラリー・クイーンの登場人物一覧の後に、J・J・マックが8ページに渡る前書きを書いている[16)]。この前書きには「編者の覚書き」が冒頭に付けられ、編者たちもこのマックなる人物が『ローマ帽子の謎』で前書きを書いたが、「出版社は当時も、いまも」、「クイーン父子の友人であるこの人物の素性は知らない」としている。しかし、「著者の希望に」添って「友の新作」に「ふたたび序文」を寄せてくれたので掲載すると書かれている。このような説明を添付することで、J・J・マックが実在するが謎の人物であることを強調するあまり、かえって反対に実在人物では無いことを隠しているのではないかという疑いが生ずる。それは後ほど論じることにして、ひとまずこの前書きの内容に目を向けることにする。この前書きでもクイーン父子の人物像について言及している。リチャードはニューヨーク市警に32年勤め、「活力あふれる小柄な銀髪の紳士で、まさに精励恪勤の人」で、犯罪と犯罪者と「法律に精通している」「実務家肌の警察官」で、「市警史上随一の重大犯罪解決の記録を打ち立てた」人物であると紹介している。一方、息子のエラリーは、「直感的な捜査手法」の「生粋の論理

家でありながら、夢想家と芸術家の資質」を兼ね備え、「母方の伯父」から受け継いだ資産があることから「教養と知識の探求に専念し」、「気が向けば推理小説を書く作家」と言う生活をしていた。そしてこの本の事件は、クイーン父子が実際に手がけた古い事件が元になったと述べた後、イタリアの山荘に暮らす現在の父子の生活に触れ、エラリーは結婚し子供もいることなどを再度書いている。この前書きは、実に9ページにも及んでいることからも、クイーン父子の話題は、このマックなる人物にとって（これを書いている人物にとってと言うべきか）かなりの関心事であることが自ずから伝わってくる。

そして、この前書きが他のクイーン作品の前書きと違う点は、その父子の間で交わされた犯罪捜査を巡る会話で、彼らの見解の相違を伝えている部分である。父親によると、犯罪者は「悪事が常習になった人々」で「百人中九十九人が前科者」で、「つねに同じ手口を使う」、さらに「犯罪が犯罪者の“職業”であること、そして、どんな職業人も自分なりの痕跡を残して消し去れない」ことを犯罪者たちは忘れているがゆえに、逮捕できる。そして、捜査の段階で「暗黒街」の「情報屋」は「大都市の警察にとってなくてはならない存在」であると述べている。一方エラリーは父親が担当する捜査の90パーセントが常習性のある犯罪で事件は解決されるが、残りの捜査に失敗している。その残りの10パーセントの事件では、「犯人が常習犯」ではなく、前科が無いので照合する指紋もなく、暗黒街とのつながりも無い「糸口のまったくない」犯罪で、それらの犯罪に魅かれると述べている。作中のクイーン父子の口を通して、作家エラリー・クイーンの犯罪や犯罪者に関する考え方、つまり、犯罪者は犯罪を職業とする前科者がほとんどを占めるという考え方が示されているのは確かである。この様な犯罪や犯罪者に対する一般論を前書きの中で披露するのは、手元資料では、これ以外にはない。

ところでこの話の中で、捜査する際に警察が手がかりとする「ベルティヨン測定法」に触れている。これはＥ・Ｊ・ワグナーの『シャーロック・ホームズの科学捜査を読む　ヴィクトリア時代の法科学百科』によると、1882年にフランスのパリの警察事務官のアルフォンス・ベルティヨンにより考え出されたものである。彼は1840年にベルギーの統計学者による「身体の寸法がすべて正確に同じ人間は世界に二人といない」という学説を元に、犯罪者の身長以外にも、たとえば、伸ばした両腕の長さ、頭部の長さや幅、左右の腕の肘から伸ばした中指までの長さなど11の身体測定値をとり、記録を見つけやすくする為に、タイプ別に分類する方法を考案した。さらに、逮捕時の犯罪者の写真をすべて同じ角度や照明の当て方で撮影し、横顔の写真も撮ること、そして、その顔写真に目、髪、そして肌の色や声や傷跡や痣などの身体的特徴も記録することを提案した[17)]。クイーンはここでは

「指紋台帳、顔写真、詳細な身上調査書」と、それに加えて「個人的性癖に関するちょっとした資料」の存在を挙げている。さらに、米国の「犯罪捜査科学は、ロンドン、ウィーン、ベルリンの警察ほど進歩していないが、少なくとも基礎となるものはある」と言うリチャードの話をマックは挙げ、当時の米国に於ける捜査手法状況と他国との比較にまで話が及んでいる。この種の現実の一般犯罪捜査への言及は、エラリー・クイーンのその他の前書きには見られないものである。

3番目は『オランダ靴の謎』[18]である。クイーンの第1タイプの前書きの後に、このマックの「はしがき」がある。まずこの題名に触れ、「題名が風変わり」なのは読み進めるにつれ分かるだろうと述べている。それから、これがマックが序文を書く3回目であると述べ、これを書くのは、「その小説化された回想録の公刊を工作した褒美だ、とエラリーは大まじめに主張している」が、「その口調からおして、《褒美》とは《刑罰》と同意語ではないかと疑っている」と「クイーン一家から特別扱いをうけている友人」と称するマックは書いている。クイーン父子の本名は秘密にしておくように彼らから要求されていること、クイーン一家はクイーン警視とエラリー夫妻とその息子とジプシーのジューナの5人でイタリアで暮らしていることが再度述べられている。ここでクイーン父子の存在により現実味を与える新たな情報として、ニューヨーク市警の「機構の歯車のなかで、もっともかんじんな歯車だったとさえ」言えるリチャードがその息子と共に解決した事件の記録は、『ローマ帽子の謎』の中で述べられているようにニューヨーク市警の保管庫ではなく、「西八十七番街」にある彼らが元住んでいた家に保存され、「個人博物館」として、彼らに「感謝するりっぱな理由をもつ、わずかな感傷家たち」により維持されていることが述べられている。そしてさらに、この作品内で殺される人物が実在することを強調するために、彼女が「国際的な声望」を持ち、「財政操作」から「家庭的事件」まですべてのことが世間の注目の的であり、「自動的に新聞の一面記事」となる人物で、彼女の死は、ニューヨークや「全文明世界」に「恐怖のあえぎ、揣摩臆測の渦巻き」を巻き起こしたことを「いまもありありと覚えている」と述べている。そして、この作品の中心をなす事件は、小説化にあたり、名前の変更や「二、三の細部の修正」があるが「本質的には真実」だとし、これが現実の話であることを殊更強調している。そして、エラリーが「鋭敏な推理精神をもって、犯罪心理の暗黒の深淵を探り、犯罪的欺瞞のひねくれた糸のほつれを解きほぐしたことは、現実においても架空においてもいまだかつてなかった」とマックは信じていると褒め称え、読者がこれを読み「愉快に感じること」を願っていると読者向け宣伝をしている。

さて4番目は、『ギリシア棺の謎』[19]である。同じくマックと名乗る人物による3ページに渡る前書きでは、「ほんものの回想録が架空物語の形に作り直されて、一般世間に提供されるようになったのは、まったくの偶然事」であると述べている。イタリアに居住するエラリーを説得し、最初の本を出版してから、「もの事は順調に行き」、「ひどく気むずかしい」エラリーを「丸めこんで」、リチャードがニューヨーク市警「在任中の彼の冒険を、さらに小説化させるのに、困難は感じなかった」と述べ、再度現実の事件の話であることを前回ほどスペースを割いていないが、強調している。この事件では、エラリーがリチャードのニューヨーク市警での「権威の庇護のもと、非公式犯罪捜査官」として、「その有名な分析推理方式を完全に昇華」していなかったことに加えて、「エラリーは試練の業火にさらされ」、「いよいよの最後まで、終始一貫して屈辱的な敗北を喫した。」それが理由で、この事件をクイーンが発表するのを躊躇ったが、この事件は彼の「最悪の失敗」ではなく「最大の成功」だと説得され、出版することになったと説明している。この事件は、エラリーが「陸離たる頭脳の鋭敏さを傾注し」、彼の「もっとも傑出した冒険」話になっていると宣伝し、読者の興味をここでも引こうとしている。さらに、「多幸なる探求を祈る」と言う言葉で終え、クイーンのように読者に対して謎を解くようにと、促している。

5番目は、『エジプト十字架の謎』[20]である。ここでも、マックなる人物が3ページに渡る「まえがき」を書いている。ここでは、まず、原稿に添付されたエラリーの覚え書きが紹介され、その中で、この本の題名のエジプト十字架と本の内容がほとんど関係ない点に触れている。『オランダ靴の謎』でも最初に題名に言及している。これらの言及は題名に国名がつくシリーズに関しての筆者クイーンの苦慮の現われであると解釈できるだろう。次に内容的には、「古代宗教の狂信」から「中央ヨーロッパの迷信と暴力の温床から生まれでた復讐鬼」や「ファラオのエジプトから再生した奇怪な、気の狂った《神の化身》」に至るまで、「一風変わった、とうてい信じられないような混合物」、「異常きわまる要素」からなる背景が「近代警察史上もっとも狡猾残虐を極めた一連の犯罪」の背景をなすと解説し、読者の読書欲を刺激している。そして、これは「小説のかたちで世間に公表される」「5番目の事件」であると書き記し、これも現実に起こった事件であることがいつものように明示されている。一方、この作品では、クイーン警視が登場しない点（「安心して欲しい」、彼は「また帰ってくる」と述べられているが）に触れるとともに、珍しくクイーン父子の個人的な生活への言及は無い。

6番目は『シャム双子の謎』[21]である。この前書きは、まず事件が起きた場所の説明から始まり、その場所を含め、登場人物が変わっている点に触れた後、リチャード警視以外

には殺人事件捜査に必要な「刑事、警官、検屍官、指紋係り、銃器の専門家」などの警察関係者が関与しないで解決された「尋常ではない」事件であると述べている。警察関係者が関わらない捜査が「起こり得た」かは「もっとも興味ある要素のひとつ」であると述べ、読者がこの作品を楽しまれることを願うという言葉で終えている。そこにはクイーン父子のイタリアでの生活、ニューヨーク市警との関係、この事件が実際起こった事件であることなど、これまでの前書きで語られている内容はすべて省かれている。前書きも6回目となると、それらの事柄はもはや必要ないと判断した結果であると推測される。

7番目は『チャイナ橙の謎』[22]の前書きである。ここではマックがエラリー・クイーンの友人で、「その友情によって名声の相伴に預かって」おり、彼「びいき」で、彼に対して「先入観を持っている」と前置きをして、「すべての興味津々たる小説を通じて」この「原稿を読んでうけた印象に勝る、しんからの感銘を受けた覚えはない」と絶賛している。この小説は、「現代における最も注目すべき殺人事件」「《うしろむきの犯罪》と副題をつけてもよさそうで」、その犯罪を解決するには「天才を要する」、とマックは書き、エラリーだからできたことであると示唆している。これは殺害された人物の衣服が“backward”、つまり、「うしろまえ」になっていたことなどを読者が読み進める内に納得が行く言葉となる。「うしろ向き」という表現の補足として、この前書きの後に、「犯罪の探知」には「科学者と予言者とが結合して、探偵として完璧の域に達していることが必要」で、「探偵はうしろ向きに見る予言者」[23]であると論じるある文献からの抜粋を載せている。この様な文献引用による補足説明は、マックだけでなく、クイーンの他の前書きでは見られない点である。そして、最後に、エラリーは「考える機械みたいな人間」で、「いったん論理が非難の指先を突きつけたが最後、友情など」は「尊重」せず、マックが事件になんらかの係わり合いがあるとなれば、逮捕させるようなことになったかもしれないとマックは書いている。さらに、マックをこの作品が「扱っている殺人事件の可能な── いやきわめて有力な── 容疑者としたかもしれない」理由を読者が「みずから発見する」ように、「ここでは触れないでおく」と、クイーンのように読者向けの謎解き挑戦メッセイジでこの前書きを終えている。

ところで、この前書きが他の前書きと異なるもう一つの点は、謎解きを読者に挑戦し、『謎』が題名に付く本を10作品も書いているエラリーが持つ謎観が披露されている点である。「すべて謎というものは、解答を知るまでは、腹立たしいまでに神秘の雲に包まれていて、さて、解答を知ってみると、なぜ、そんなに長い間、ごまかされていたのだろうと不思議なくらい」であるとエラリーは述べている。この「謎」に関しては、後ほど再び言

及することにする。

８番目が『スペイン岬の謎』[24]の前書きである。最初にスペイン岬とそこに建つ殺人事件の舞台となる邸宅についての説明が2ページ少々も続き、その実在性を読者に訴えている。そして、エラリーが行くところ凶悪犯罪がある運命で、この岬でも「推理を駆使して成功するクイーン好みの」殺人事件が起き、この殺人事件は、「第一級の好読物を、もう一冊」つくることになったと読者への作品宣伝で終わっている。クイーン父子のニューヨーク市警との関係や、イタリア生活についての言及は姿を消している。

これらの８つの前書きは、クイーン父子と作品で扱う事件とその関係者たちの実在感を高めようとする意図で書かれているのは明らかである。同時に読者に対する本の内容に直結する補足説明、状況説明の役割を果たし、作品の中に、そして謎解き挑戦へと読者を誘い込もうとしている。そして３ページ以上に渡る長い点もその特徴として挙げられるだろう。

ところで、作家エラリー・クイーン自体が実際には一人ではなく二人の人物（従兄弟のマンフレッド・Ｂ・リーとフレデリック・ダネイ）が作り出した架空の人物、共同ペンネームであることが隠されていた当時、これらのマックの前書きで述べられているクイーン父子や彼らが扱う殺人事件物語が、父リチャードがニューヨーク市警に勤めていた当時実際に扱った事件に基づかれているとする彼の話を読者は信じたかもしれない。しかし、長い間隠されていたペンネームに関する事実が明かされた段階で、クイーン父子が実在する人物であるとする話も疑わしくなるのは当然のことである。それと同時に、Ｊ・Ｊ・マックの存在自体も疑わしくなる。その説を後押しする証拠として、既に言及しているように『ドルリイ・レーン最後の事件』[25]でのクイーン名義の前書きを挙げることができる。繰り返しとなるが、その前書きの中で、主人公のドルリー・レーンが「言うまでもなく、往年のイギリス演壇の巨頭」で、「思わぬことから、氏本来の仕事とは大きな懸隔のある」「犯罪事件の捜査」をすることになり、「明敏な頭脳」で「めざましい実績」を挙げ、筆者エラリー・クイーンが「悉くを忠実に記録して」、『Ｘの悲劇』、『Ｙの悲劇』、『Ｚの悲劇』として発表したと書かれている。そのレーンやクイーンに実在感を与えるような記述の仕方は、上記のＪ・Ｊ・マックのものと比較すれば、同類であることが明らかである。エラリー・クイーンの名前の真実が明るみに出た後にマックの前書きを読み直すと、マックにより書かれたとされる一連のこれらの前書き自体がクイーンにより書かれ、マック自身もクイーンの作り出した架空の人物である可能性が現実味を帯びてくることになる。マックによる前書きに関して上記のように詳しく内容を説明し分析した理由はここにある。

さらに、既に言及しているロス誕生をめぐる記述箇所もマックの架空性を暗示する手がかりとなるだろう。とは言え、マックの実在性に関しては、今後も調べてゆくつもりである。

一方、ここで興味深い点をさらに一つ指摘できる。それは、作家エラリー・クイーン名義で発表された作品は、ニューヨーク市警に勤める父親のリチャードと息子のエラリーが解決した事件を息子が書いたものであるという設定である。それに対して、その実際の作家エラリー・クイーンは、現実には二人の人物が作り上げた架空の人物であること、しかも父子ではなく従兄弟であることが後に明かされることになる。実は、ここにエラリー・クイーンという作家を巡る大きな謎が隠されていたことになる。つまり、クイーンが作品中で述べるように、「読者は解決にたどりつく前に」クイーンの場合と同じく、「あらかじめすべての手がかりをあたえられるはずである」という言葉通りに、作家本人を巡る謎解きの手がかりは与えられていたのである。つまり、作品内のエラリー・クイーンは、2人の人物が関わっていて、しかも、親子という血縁関係にあると言う手がかりである。名前を巡る人間の数は 2、関係は血縁である。現実に当てはめてみると、エラリー・クイーンは2人の人物の共同ペンネームであり、ダネイ曰く、「兄弟以上に身近な存在であった」[26)] 従兄弟という血縁関係にある。これは巧妙かつ策略的な手がかりであると言えるだろう。さらに、そもそも、『ローマ帽子の謎』の中で、「物語に出てくる友人たちも重要な登場人物もすべて仮名にすること、本名は一般読者に永遠に明かさ」無いことを条件に、出版することになり、このリチャード・クイーンとエラリー・クイーンという名前も、「本名ではない」とマックは述べている。そして、畳み掛けるように『Yの悲劇』の前書きの中で、バーナビー・ロス名義で発表された4作品が「本当の仮名であるエラリー・クイーン作として刊行されることになった」と記述し、エラリー・クイーンは「本当の仮名」であると明かしている。つまり、クイーン父子の名前自体が本名ではなく、エラリー・クイーンという作家の名前自体も本名ではないことを明言しているのである。これほどはっきりとした手がかりが読者に与えられていたのである。ただ読者は、作家の名前に謎が隠されていること自体に気づかなかったはずで、これらの手がかりが手がかりとはならなかったに過ぎない。それゆえに、名前に謎が隠されていたことを知らされた読者は、謎の解答を求めるプロセスを経ずに、『チャイナ橙の謎』の前書きの中で書かれている「謎」に関する発言の言葉を借りれば、まさに、「なぜ、そんなに長い間、ごまかされていたのだろうと不思議なくらい」と思わされることになる。

名前に関しては、更なる記述が『ローマ帽子の謎』の中にあり、「これらの名を選んだ

のはエラリー自身であり」、「読者が文字の並び替えのような見かけ上の手がかりから本名を探り出そうとしても、徒労に終わるように工夫されている」と書かれている。リーとダネイがこのエラリー・クイーンというペンネームを考え出したのは、探偵小説コンテストに作品を出す際に、コンテストの規則で「ペンネーム」であることが求められていたからである。そして「少しまれで、覚えやすく、リズミカルな響き」[27]のする名前として考え出したのが、この名前である。つまり、その名前を選んだのは彼らであり、文字の並べ替えなどではない方法で考え出した点に関しても前書きの中で手がかりを与えていたことになる。しかし、この作家の名前に関してはもう一皮被されていた。実は、彼らはマンフレッド・B・リーとフレデリック・ダネイと名乗っているが、これも彼らの本名ではない。実際は、フランシス・M・ネヴィンズによると、リーの本名は、マンフォード・レポフスキー（Manford Lepofsky）で、ダネイはダニエル・ネーサン（Daniel Nathan）である[28]。ここまでくると絶対に本名に辿り着けないのは確かである。クイーンやマックも含め、作中の登場人物と事件に実在感を与え、虚構の世界をより現実の世界に近づけようとする前書きの内容は、作家本人たちの名前を巡る謎解きの手がかりを織り込みたい気持ちが無意識に、または意識的に働いた結果であると言えるかもしれない。読者への謎解きの挑戦は作品内だけでなく、前書きの中にもあったことになる。これは謎解きのエラリー・クイーンらしい前書きの特徴と言えるだろう。この実在感の強調と謎解き挑戦と言う特徴を共有するクイーンとマックの第2タイプの前書きは、カーとは違い、読者向けに書かれており、どちらかと言えば、読書欲を刺激するものと言える。

3．アガサ・クリスティー

最後に、アガサ・クリスティーに関して、彼女の全作品ではないが、手元にある日本語翻訳版（作品内で活躍する探偵はポワロやミス・マープルなど様々であるが）合計90冊を調べてみた。その結果、実に58冊に前書きが見つかった。余りにも数が多いため、ここでは第2タイプに属する12作品を論じ、残りは次回言及することにする。

この、2番目のタイプの前書きが付いているそれらの作品は、1.『ナイルに死す』、2.『死が最後にやって来る』、3.『ポアロのクリスマス』、4.『アクロイド殺害事件』、5.『書斎の死体』、6.『フランクフルトへの乗客』、7.『ひらいたトランプ』、8.『検察側の証人』、9.『ミス・マープルと十三の謎』、10.『親指のうずき』、11.『クリスマス・プディングの冒険』、12.『ゼロ時間へ』[29]である。

まず作品が生まれるきっかけが旅行であることを示す前書きである。1番目の「著者の前書き」は、2ページに渡っている。この本はエジプト旅行から帰ってすぐに書き上げたもので、ナイル川を「遊覧船に乗って、アスワンからワディ・ハルファまで旅をしているような気持ち」になり、実際の船客よりも作中の登場人物たちの方が「リアルで身近な存在」になっていると書いている。彼女の外国を舞台とした作品の「“外国旅行物”の中で最もいい作品の1つ」で、「探偵小説が“逃避的文学”だとするなら」、「読者は…犯罪の世界に逃れるばかりでなく、南国の陽差しとナイルの青い水の国に逃れてもいただける」と彼女の探偵小説観を披露している。そして、友人の勧めで舞台化したことにも触れている。

次に、ある人物がきっかけとなったとする前書きが2つある。2番目の作品は、同様にエジプトが題材であるが、その献辞は、「S・R・K・グランヴィル博士」となっており、その後に「親愛なるスティーヴン」と続く。今回のきっかけは旅行ではなく、彼である。彼は、エジプト学教授[30]で、エジプトを舞台とする探偵小説を書くように提案し、資料（本を6冊以上）を貸し、「質問に忍耐強く答えてくれ」、励ましてくれたことからこの作品が書けたと述べている。この献辞の後に「作者の言葉」という前書きが付け加えられている。この物語が、「紀元前2千年頃のエジプト、ナイルの河畔にあるシーヴズ」が舞台となっていること、そして、「第十一王朝時代」の古いエジプトの手紙からヒントを得て、この作品を書いたことが述べられている。この手紙は、「二十年前ニューヨークのメトロポリタン博物館エジプト探検隊によりルクソールの対岸の岩窟墓から発見され、パティスコム・ガン教授により翻訳され博物館の広報で発表したもの」というかなり専門的な説明から、考古学者の夫を通して考古学発掘現場や考古学世界に触れ、その影響を受けていたことが見て取れる。さらに、読者が本の内容をより良く理解するため古代エジプトについて、毎日の墓所礼拝と墓所僧侶の存在と彼らの財源について、そしてエジプトの古文の中の“兄”と“妹”という言葉が普通“愛人”を意味し、時には“夫”と“妻”を意味することがある点、古代エジプトの農事暦について解説している。ここにも彼女を取り巻く考古学の影響が見られる。

3番目も同様にきっかけは人物である。これは、「親愛なるジェームズ」で始まる1ページの前書きである。「最も誠実で、最も親切な読者の一人」のジェームズが「もっと血にまみれた思いきり凶暴な殺人」事件を求めたことに応えて、彼のために「書かれた物語」で、彼が気に入ってくれることを願っていると書かれている。この最後の署名に「あなたの親愛な義妹」とあるように、ジェームズとはクリスティーの姉の夫のジェイムズ・ワッツのことである[31]。

次にクリスティーの創作観が見て取れる前書きで、上記に挙げたリストの4番目である。彼女はこれが彼女の作品の中で一番よく知られており、その成功の理由は、その物語の中心をなす「アイディア」であると述べている。それは「一度しか使えない独創的なもの」で、「たいていの読者を完全に驚かせ」る一方で、作家としては「挑戦を試みるに値する技術的な興味」を持たせるものであるとしている。そして最後にこれが舞台化された時、彼女が興味を感じていた登場人物がまるで違う人物にされ、「これほどつらいことはなかった」と述べ、話を終えている。1番目の前書きでも触れているが、彼女は自分の作品が舞台化されることにかなり関心があったことがここからも窺い知れる。これに関しては、後ほど、『検察側の証人』でも言及する。

5番目の前書き「序文」では、小説にはタイプ別にそれぞれ「おきまりの素材」があり、「探偵小説には“書斎の死体”」であると書き出している。それについて、クリスティーは「きわめてオーソドックスかつ伝統的な」書斎で、「死体は奇想天外な、人をあっといわせるもの」という条件で数年に渡り構想を練っていた。そしてある夏に、「海辺のしゃれたホテル」に滞在中に、ダイニング・ルームで出会った車椅子を使う「脚の不自由な初老の男性」と側にいるもっと若い世代の家族を目にし、この作品が生まれたと書いている。しかし、作品の登場人物に実在の人物を登場させるのかと問われると、実在の人物を「作品のモデルにするのは不可能」で、彼らは「作中で生命を失ってしまう」が、“架空の人物”には「様々な資質」と彼女自身の「想像の産物」を与えることが出来ると述べている。そしてその初老の男性を中心にいろいろな人物を付け加え、「ミス・マープル風に調理してテーブルに出すとしよう」と述べ、前書きを終えている。つまり、小説は虚構の世界であり、その世界を展開させるきっかけとなる実際の人物が居るとしても、彼女の場合は、あくまでもそれは単なるきっかけに過ぎないと言うことである。

この創作観をさらに熱く語っているのが、6番目の「まえがき」である。これは、彼女には珍しく8ページにも及んでいる。ここでは、創作する際に必要な3つの要素について、読者からの質問に答える形で書いている。最初に、作品を書く際のアイディアはどこから来るかと言う質問に答えている。「世間の人々は、どこかにアイディアの魔法の泉があって、小説家というのはその泉の水を汲む方法を発見した人たちのことである」と「堅く信じこんでいるふしがある」と書いている。実際は、「自分で考え」、「あれこれ細工を加え」、「しだいに発展させ」、「徐々に形をととのえてゆき」、書くという「困難な仕事」であり、アイディアの中には1、2年後に使うものもあると述べている。次に、作品に登場する人物は現実の人間かどうかに関する質問に答えている。この話題は、5番目の前書きの中で

も既に扱われているが、ここでは少し過激とも言える回答をしている。「こんなばかげた思いつきは、怒りをこめて否定」すると述べ、「わたしが作中人物を考え出すのです。彼らはわたしのものです」、彼らは「わたしが望むとおりに行動し、わたしが望むとおりの人物になってくれなければ困る」し、「彼らはわたしのために生きはじめ、時には自分自身の考えを持つこともある」が、それは「わたしが彼らを現実の人間らしく作りあげたから」であると強い口調で述べている。そして作品の舞台、つまり背景に関しては、それは「もともとそこに存在していて、作者を待っているものでなければならない」ので現実のもの、「実在するもの」、「現実の人間、現実の場所」、「時間と空間の中で明確な位置を占める場所」でなければならないとして、彼女自身の代表的な幾つかの作品に結び付けて語っている。そしてその完全な情報は、いろいろな事件を報じる新聞の「朝刊の第一面」から得られると説明している。これらは物語を生み出す創作活動の根本であるがゆえに、クリスティーはいつになく饒舌な前書きになったと考えられる。

7番目の「序文」は、「探偵小説は競馬に似ている」という言葉から始まり、探偵小説を読む際に絶えず付きまとう質問、「犯人は誰か」について書く側からの意見を述べている。つまり、競馬では、勝ちそうな馬は勝たず、負けるに決まっている馬が勝つのと同じように、探偵小説でも犯罪を犯しそうに無い人物が、「あとを読まなくて十中八、九まで」犯人になる。しかし、この作品はそれとは違い、犯罪を犯しそうな4人の人物が登場し、「殺人者の＜心理＞をたどって犯人を推測する」ことになり、そのような推測は「探偵小説の醍醐味」のはずであると誇らしげに述べている。

クリスティーの作品舞台化への関心度の高さを1番目、4番目の前書き同様に窺い知れるのが、8番目の、「作者の言葉」である。この作品は登場人物が多いことを踏まえ、舞台上演する場合のキャスティングへのヒント、「人員削減計画」が書かれている。台詞の無い役は「アマチュア俳優を起用する」とか、「観客に舞台に上がってもらう」方法を参考として提案している。またグリータ役の女優が、別の場面で登場する“もう一人の女”と掛け持ちをすると、観客が「“トリック”と勘違いする」ので「避ける方」がいいとアドバイスまでしている。そして彼女が楽しみながら書いたこの作品を上演する人々も同じように楽しんで欲しいし、その上演成功を祈ると述べている。この後に登場人物で兼任できる役や人数を減らせる役、そして省略できる役の一覧表を載せている。

次に、彼女の作り出した主人公について言及している前書きがある。9番目の作品の2ページに渡る「著者のことば」がその一つである。これはミス・マープルが登場する初作品であると前置きをして、クリスティーの祖母に似ているミス・マープルの人物像を伝え

るために、その祖母の話をしている。その祖母は、「桜色の頬をした老婦人で、世の中からまったく引きこもったむかし風の暮らしをしていたくせに、人間の邪悪さ」を「とことん知りぬいて」いて、「あの人たちの言うことを、鵜呑みにしているのかい。わたしならそうはしませんよ」と言っていたと書いている。それゆえに、このマープルの話は楽しんで書けたと述べている。ところで、ここで、初登場のはずのミス・マープルがポワロと人気を2分しているとクリスティーは書いている。矛盾するような発言であるが、本として出版されるのはこれが最初であるが、1928年に既に雑誌に短編が6つ掲載されていた事実がそこにはある[32)]。引き続き、両者を比較し、マープルは「短い謎とき」向きで、ポワロは長編向きであると分析している。そして、彼女はどちらかと言うとマープルの方に「肩を持っている」と述べ、祖母に対する思いをマープルに重ね合わせているのが感じ取れる前書きとなっている。この作品が、マープルファンにとっては「彼女の真髄を知るに足る一冊」であるという言葉で締めくくっている。

10番目の前書きは、「トミーとタペンス」のその後を問う読者からの質問に答えたものである。この二人は、クリスティーが作家として2作目の長編の中で作り出したお気に入りの主人公で、この作品の中で結婚した「おしどり探偵として活躍するベレズフォード夫妻」のことである。彼らは1922年に初登場している。この『親指のうずき』は1968年刊行なので、時の経過を受けて、初老になっているが、「敢闘精神はいささかも衰えて」いないので、この物語の中で「再会を楽しんで」くれることを願っていると語る短いものである。

11番目は、そこに収められている短篇作品をクリスマスの料理になぞらえ、解説している。メイン・ディッシュにあたる『スペイン櫃の秘密』は「ポアロの特別料理」で、「最高の腕前を発揮している事件」、ミス・マープルも『グリーンショウ氏の阿房宮』の中に登場する。もう一つのメイン・ディッシュの『クリスマス・プディングの冒険』の説明では、彼女自身のクリスマスのご馳走や楽しかったその1日の思い出を女性らしい視点から語っている。

12番目の短い前書き（1ページ）は「ロバート・グレイヴズへ」となっている。それに「親愛なるロバート」という言葉が続き、彼個人に宛てたものであることが分かる。彼女の本を好み、やさしい言葉をかけてくれると言う彼に、彼の「お楽しみのために書かれた物語」であるこの本を捧げるのに「勇気を出して」いるのは、彼の批判的評論を恐れているからであることが示唆されている。そして、この本は、「ミスター・グレイヴズの刑場のさらし台に載せられるような文学作品ではない」と最後に述べるほど、批判しな

いようにとくれぐれも頼んでいる珍しい献辞である。このロバート・グレイヴズとは彼女と同時代のイギリスの詩人・小説家・批評家のロバート・グレーブズ（Robert Graves、1895-1985）と考えられる。

ところで、クリスティーは作品数が多いことから前書きも多いと考えられるが、その一方で、その数から、彼女は第1の短い献辞タイプの前書きを付けるのを好む作家であったと推測できる。そして、第2タイプは全般的に長い傾向がある点も彼女の特徴としてあげることができる。一方、7番目の前書きの最後で、これはポアロの「自慢の手柄話」となるか、それとも親友のヘイスティング大尉の「非常に単調」な話となるか、読者はどちらの意見に賛成するのかと問いかけ、11番目では読者に対して「クリスマスおめでとう」という言葉で締めくくっており、これらはクイーンの前書きの終りに見られる読者への挑戦とは明らかに違うもので、ミス・マープル的ソフトなアプローチと言えるだろう。

おわりに

以上3人の作家の前書きについて分析してみた。ジョン・ディクスン・カーは他の2人と比べると、前書きを付けることに余り関心がなく、個人的メッセイジに終始し、読者を意識していないことが分かる。一方、エラリー・クイーンは、前書きの中でも読者に事件の謎解きに挑戦するように誘い、登場人物一覧表すら添付し、作品内容に関係した情報を加えるなどの内容を盛り込んでいる。そして作家エラリー・クイーン本人に関する謎解きのヒントを前書きの中にそれとなくもぐりこませ、自らその謎を読者に明かし、告白する場として前書きを利用している。それにより、作品内で扱われる事件とクイーン父子を含めた登場人物が全て実在すると、クイーン本人と彼の友人と称するＪ・Ｊ・マックが強く主張している点に疑問が投げかけられることになり、マック自身の実在性も怪しくなるという結果を招いている。アガサ・クリスティーの場合も読者を意識し、作品に関係した話を盛り込んだ前書きとなっている。しかし、登場人物は実在すると主張するクイーンに対して、彼女は、自ら作り出した架空の人物たちで、彼らの実在性を問う質問自体が、「ばかげた思いつき」で、「怒りをこめて否定する」とまで述べ、クイーンとの決定的な違いを見せている。この点に関して、反対の立場のクイーン同様に、クリスティーは2つの前書きの中で言及する程こだわりを持っていることが分かる。その他に、作品が生まれるきっかけとなる旅行や2人の人物の存在を含め、彼女の創作観や探偵小説観、さらに作品の舞台化への関心を語っている。また、考古学者の夫の影響を感じさせる古代エジプトにつ

いてのかなり専門的な説明・解説やクリスマスの思い出など、多種多様な要素が前書きの中に含まれている点がクリスティーの特徴と言えるだろう。3人の作家の前書きには以上の様な特徴があることが明らかとなった。しかし、彼らの前書きは全て、第1、第2タイプに属するものである。次回は、これを基に、第3タイプに属するガードナーの前書きについて考察することにする。

【註】

1) John Dickson Carr、
   1. “The Blind Barber”、1934年、邦題『盲目の理髪師』、井上一夫訳、東京創元社、2007年新版初版（1962年初版）、東京、p.10。巻末に戸川安宣による「好事家のためのノート」、pp.425-430。
   2. “The Crooked Hinge”、1938年、邦題『曲がった蝶番』、三角和代訳、東京創元社、2012年初版、東京、p.8。
   3. “A Graveyard to Let”、1949年、邦題『墓場貸します』、斎藤数衛訳、早川書房、昭和55年、東京、p.3。
   4. “The Bride of Newgate”、1950年、邦題『ニューゲイトの花嫁』、工藤政司訳、早川書房、昭和58年、東京、p.3。
   5. “Deadly Hall”、1971年、邦題『死の館の謎』、宇野利泰訳、東京創元社、2004年15版（1975年初版）、東京、p.6。巻末に「好事家のためのノート」、pp.421-424。
2) 森英俊編著、『世界ミステリ作家事典　[本格派篇]』、図書刊行会、1999年（初版1998年）、東京、p.344。
3) Michael Dirda, “John Dickson Carr,” *Mystery and Suspense Writers, The Literature of Crime, Detection, and Espionage*, Vol.1, Robin W. Winks and Maureen Corrigan, eds., Charles Scribner’s Sons, New York, 1998, pp.113-129, p.117。
4) 引用：同上、p.125。参照：『世界ミステリ作家事典　[本格派篇]』、pp.106-107。
5) 『世界ミステリ作家事典　[本格派篇]』、p.803。
6) 参照：Michael Dirda、p.126。
7) Michael Dirda、p.114。
8) John Dickson Carr、“The Curse of the Bronze Lamp”、1945年、邦題『青銅ランプの呪』、後藤安彦訳、東京創元社、1983年、東京、p.6。
9) 同上、戸川安宣による解説部分（pp.426-430）、p.427。
10) Ellery Queen、
   “The Dutch Shoe Mystery”、1931年、邦題『オランダ靴の謎』、井上勇訳、東京創元社、2012年3版（1959年初版、2009年新版）、東京、p.9。
   “The American Gun Mystery”、1933年、邦題『アメリカ銃の謎』、井上勇訳、東京創元社、

2008年49版（1961年初版）、東京、p.8。

11）Ellery Queen、“The Roman Hat Mystery”、1929年、邦題『ローマ帽子の秘密』、越前敏弥・青木創訳、角川文庫、平成24年、東京、pp.10-14。ただし、題名に関しては、一般的に付けられている邦題『ローマ帽子の謎』を使っている。

12）Ellery Queen、“The French Powder Mystery”、1930年、邦題『フランス白粉の謎』、越前敏弥・下村純子訳、角川書店、平成24年、東京、pp.10-13。同題名で東京創元社から井上勇訳で出版されている1969年4版（1961年初版）にはこの一覧表の付いた前書きはない。

13）Ellery Queen　(最初はBarnaby Ross名義)、

1. “The Tragedy of X”、1932年、邦題『Xの悲劇』、鮎川信夫訳、東京創元社、2010年105版（1960年初版）、東京、pp.9-11。
2. “The Tragedy of Y”、1932年、邦題『Yの悲劇』、鮎川信夫訳、東京創元社、1977年57版（1959年初版）、東京、pp.9-10。
3. “The Tragedy of Z”、1933年、邦題『Zの悲劇』、越前敏弥訳、角川書店、平成23年初版、東京、p.8。
4. “Drury Lane's Last Case”、1933年、邦題『ドルリイ・レーン最後の事件』、宇野利康訳、早川書房、2006年3刷（1996年発行）、東京、pp.3-4。

14）『ローマ帽子の秘密』、pp.21-22。

15）同上、pp.17-25。

16）『フランス白粉の謎』、越前敏弥・下村純子訳、pp.16-23。

17）Ｅ・Ｊ・ワグナー、『シャーロック・ホームズの科学捜査を読む　ヴィクトリア時代の法科学百科』、日暮雅通訳、河出書房新社、2009年、東京、pp.121-123。

18）Ellery Queen、“The Dutch Shoe Mystery”、1931年、邦題『オランダ靴の謎』、井上勇訳、東京創元社、2012年3版（1959年初版、2009年新版）、東京、pp.13-15。

19）Ellery Queen、“The Greek Coffin Mystery”、1932年、邦題『ギリシア棺の謎』、井上勇訳、東京創元社、1971年25版（1959年初版）、東京、pp.9-11。

20）Ellery Queen、“The Egyptian Cross Mystery”, 1932年、邦題『エジプト十字架の謎』、井上勇訳、東京創元社、2011年3版（1959年初版、2009年新版）、東京、pp.10-12。

21）Ellery Queen、“The Siamese Twin Mystery”、1933年、邦題『シャム双子の謎』、井上勇訳、東京創元社、2002年57版（1960年初版）、東京、pp.9-10。

22）Ellery Queen、“The Chinese Orange Mystery”、1934年、邦題『チャイナ橙の謎』、井上勇訳、東京創元社、2009年60版（1960年初版）、東京、pp.9-11。

23）同上、p.11。

24）Ellery Queen、“The Spanish Cape Mystery”、1935年、邦題『スペイン岬の謎』(ここで使用しているのは、石川年訳で邦題は『スペイン岬の裸死事件』である)、角川書店、昭和41年4版（昭和39年初版）、東京、pp.9-12。

25）『ドルリイ・レーン最後の事件』、p. 3。

26）Francis M. Nevins, “Ellery Queen,” *Mystery and Suspense Writers, The Literature of Crime, Detection, and Espionage,* Vol.1, Robin W. Winks and Maureen Corrigan, eds., Charles

Scribner's Sons, New York, 1998, pp.757-771, p.757。

27) 同上、p.758。

28) 同上、p.757。

29) Agatha Christie、

1. "Death on the Nile"、1937年、邦題『ナイルに死す』、加島祥造訳、早川書房、2010年、東京、pp.4-5。
2. "Death Comes As the End"、1944年、邦題『死が最後にやって来る』、加島祥造訳、早川書房、2004年、東京、p.3。
3. "Hercule Poirot's Christmas"、1938年、邦題『ポアロのクリスマス』、村上啓夫訳、早川書房、2012年5刷（2003年発行）、東京、p.4。
4. "The Murder of Roger Ackroyd"、1926年、邦題『アクロイド殺害事件』、大久保康雄訳、東京創元社、2012年5版（1959年初版、2004年新版）、東京、p.9。
5. "The Body in the Library"、1942年、邦題『書斎の死体』、山本やよい訳、早川書房、2010年5刷（2004年発行）、東京、pp.5-6。
6. "Passenger to Frankfurt"、1970年、邦題『フランクフルトへの乗客』、永井淳訳、早川書房、2009年2刷（2004年発行）、東京、pp.7-14。
7. "Cards on the Table"、1936年、邦題『ひらいたトランプ』、加島祥造訳、早川書房、2008年3刷（2003年発行）、東京、pp.9-10。
8. "Witness for the Prosecution"、1954年、邦題『検察側の証人』、加藤恭平訳、早川書房、2012年3刷（2004年発行)、東京、pp.3-4。
9. "The Thirteen Problems"、1932年、邦題『ミス・マープルと十三の謎』、高見沢潤子訳、東京創元社、2011年、東京、pp.9-10。早川書房、2012年発行、中村妙子訳では原題は同名であるが、『火曜クラブ』と訳されている。
10. "The Pricking of Thumbs"、1968年、邦題『親指のうずき』、深町眞理子訳、早川書房、2012年4刷（2004年発行）、東京、p.3。
11. "The Adventure of the Christmas Pudding"、1960年、邦題『クリスマス・プディングの冒険』(短篇集)、橋本福夫・他訳、早川書房、2009年3刷（2004年発行)、東京、pp.3-5。「はじめに」の部分は橋本福夫訳。
12. "Towards Zero"、1944年、邦題『ゼロ時間へ』、三川基好訳、早川書房、2010年5刷（2004年発行）、東京、p.3。

30) Agatha Christie、"An Autobiography"、1977年、邦題『アガサ・クリスティー自伝』（下）、乾信一郎訳、早川書房、2009年2刷（2004年発行）、東京、p. 430。詳細：pp.451-456。

31) 参照：Matthew Bunson, "The Complete CHRISTIE An Agatha Christie Encyclopedia"、2000年、邦題『アガサ・クリスティ大辞典』、笹田裕子、ロジャー・プライア訳、(株)柊風舎、2010年、東京、pp.170-171。

32) 参照：同上、p.43。